幼児の意思決定への母親による支援行動 (2)

幼児の意思決定に対する評価が母親の意思決定支援行動へ与える影響

○川嶋健太郎¹・蓮見元子²・北原靖子²

(¹東海学院大学・²川村学園女子大学)

キーワード：意思決定支援・幼児・母親

Mother's support behavior in child's decision making (2)

Kentaro KAWASHIMA¹, Motoko HASUMI² and Yasuko KITAHARA^{2, #}

(¹Tokaigakuin Univ., ²Kawamuragakuen Woman's Univ.)

Key Words: Decision support, Child, Mother

目 的

家庭において子どもは様々な選択をする機会がある。例えば、何で遊ぶか、何を食べるか、どの服を着るかなどについて意思決定をしている。保護者は子どもの意思決定を様々な方法で支援するだろう。例えば、子どもが明らかに誤った選択をした際に、「こうしたら、こうなっちゃうよ」と理由を説明して別の選択をするように促したりする。この保護者の支援は子ども自身の意思決定能力やスタイルに応じて異なってくると考えられる。

そこで本研究では子どもの意思決定能力についての母親の評価が子どもへの意思決定支援行動に与える影響を検討する。まず子どもの意思決定についての母親による評価に関わる要因を検討する。また幼児の学年（3歳児クラス・4歳児クラス・5歳児クラス）により母親は意思決定支援の仕方に違いがあるかについても検討する。

方 法

調査対象 3歳から6歳の幼児を持つ母親600名を調査対象とした。この内、回答に不備がない3歳児クラスの母親104名・4歳児クラスの母親118名、5歳児クラスの母親199名の計421名を分析対象とした。

調査時期 2017年3月に実施した。

質問紙 ①母親による幼児に対する意思決定支援尺度：蓮見他（2017）により作成された4因子「話し合い・説明による支援」、「意思尊重・待機支援」、「親主導選択肢提示支援」、「選択肢絞り込み支援」20項目。②母親による幼児の意思決定評価：自分の子どもの意思決定について同じ年齢の他の子どもと比較して「1. 全く当てはまらない、から「7. よくあてはまる」までの7段階で12項目について回答を求めた。

手続き 調査会社（クロス・マーケティング(株)）に調査委託し、調査対象者にWebページ上で回答をさせた。

結果と考察

母親による幼児の意思決定評価について探索的因子分析を（最尤法・プロマックス回転）行った。当該因子に、50以上の負荷を基準に項目を選定し、繰り返し因子分析を行った結果、10項目が残る「自分で決める」「人任せ」「こだわる」の3因子が抽出された（表1）。

母親による幼児の意思決定評価が母親の意思決定支援行動にどう影響を与えるか検討するために、共分散構造分析を行った。この際に母親による幼児に対する意思決定支援尺度の各因子の質問項目から因子負荷量の小さい項目を一つ省略した。最終的に採用されたモデルを図1に表した（ $\chi^2(283) = 875.6, p < .000, CFI = 0.845, RMSE = 0.071, SRMR = 0.074$ ）。保護者による評価において、子どもが「自分で決める」事ができるならば意思決定の支援は「子どもの意思尊重」という見守り型の支援をし、「親主導選択肢提示」や「選択肢絞り込み」という支援は少なくなる。また「こだわる」子供に対しては「親主導選択肢提示」「選択肢絞り込み」「話し合い・説明」とい

う積極的な支援が多く行われることを示唆している。

表1 母親による子どもの意思決定能力評価の因子分析結果

	F1	F2	F3
F1:自分で決める ($\alpha = .82$)			
いろんなことを自分で選んでいる	.935	-.070	-.189
パッと簡単に決められる	.614	-.103	.219
好き嫌いがハッキリしている	.605	-.046	.135
意思が明確である	.570	.120	-.115
自分自身で決めたがる	.554	.032	.249
F2:人任せ ($\alpha = .72$)			
「なんでもいい」とよく言う	.184	.948	-.099
「お母さんが選んで」とよく言う	-.093	.621	.130
F3:こだわる ($\alpha = .62$)			
自分が選んだものでないと嫌がる	-.159	.085	.642
こだわりが強い	.168	.031	.587
親の言うことは聞かない	.052	-.082	.557

* $p < .05$, *** $p < .0001$

$\chi^2: 875.6, df: 283, p < .000, CFI: 0.845, RMSEA: 0.071, SRMR: 0.074$

図1 モデルと標準化推定値

図1のモデル幼児のクラス（3歳児・4歳児・5歳児クラス）を母集団とした多母集団同時分析を行ったところ、各モデルの違いはほとんど泣く、幼児クラスによる違いは見られなかった（表2）。

表2 モデル比較の結果

モデル	χ^2	df	p	CFI	TLI	AIC	BIC	RMSEA	SRMR
配置不変	1812.68	849	0.000	0.78	0.74	33258.46	34398.48	0.09	0.09
弱測定不変	1855.26	887	0.000	0.77	0.75	33225.03	34211.43	0.09	0.10
強測定不変	1902.10	925	0.000	0.77	0.76	33195.87	34028.65	0.09	0.10
厳密な測定不変	1992.32	977	0.000	0.76	0.76	33182.09	33804.65	0.09	0.10
全母数等値	2018.37	991	0.000	0.76	0.76	33180.14	33746.11	0.09	0.10